清楽における戯劇性

楊　桂香

一、はじめに

日本の文化文政期（1804－1830年）、中国の貿易船主或いは船客が中国清代の音楽を携えて日本の長崎に来て、日本の文人に伝えた、というのが、中国清楽の伝来に関する一般的な記述である（平野 1983:2465）。

多くの著述は、これに関連して、二人の人物が前後して来日し、清楽を伝えるだけではなく、後の伝承にも大きな役割を果たしたことを記している。その一人が金琴江であり、もう一人は林徳建である。長崎明清音楽保存会の会員である小曾根キク子、中村キラ両氏は林徳建の系譜に属するという。

こうして伝来した清楽に関しては、多くの楽譜が残されている。特に波多野太郎の『月琴音楽史略』（波多野 1976）と塚原広子の『月琴新譜』（塚原 1991）は目録、曲名の記述が多く、42冊の楽譜集は241首の曲を収めている。

しかし、こうした楽譜が伝承過程でも大きな役割を果たしていると考えることはできない。例えば、筆者が長崎で中村キラ氏に教えて頂いた時、ご自身で教えられるのが7首だけであるとのことであった。それらは、「算命曲」、「九連環」、「茉梨花」、「紗窓」、「平板調」、「金線花」、「西皮調」という所謂「唱曲」の短い歌であった。

これまで、多くの研究者が清楽に言及するとき、主にこの7首の楽曲を取り上げたため、清楽に「戯曲」があることが殆ど見落されてきている。

本報告では清楽にある「雷神洞」「翠賽英」「三国志（曹操と関羽）」な

どの「戯曲」をとりあげて、清楽における戯劇性を明らかにしたい。

二、清楽にある「戯曲」に触れる先行研究

清楽全体を通じての研究は少なく、平野健次をはじめ、波多野太郎の他、最近では、塚原康子、大貫紀子と塚原広子の研究を取り上げることができる。しかし、それらは主として、江戸後期から明治期にかけての伝承や楽器の種類およびその奏楽状況、或いは現存する清楽の刊行楽譜の分析などを通した清楽の考察といえよう。

清楽の曲目の解説や演奏方法に関して詳しく触れる研究は、塚原広子の『月琴新譜』における「九連環」、「茉梨花」など 13 曲の説明（塚原 1991）にしか至ってないため、清楽の実態についてはまだ十分把握されていないということが明らかである。

しかし、楽譜の分析には触れていないが、清楽には「九連環」などの曲だけではなく、「戯曲」もあったのではないかということに言及する学者が二人いた。その一人は、波多野太郎で、もう一人は塚原康子である。

波多野太郎は自ら集めた 51 冊の清楽の楽譜を纏め、楽譜に関する説明を加えて、『月琴音楽史略』(波多野 1976) と名づけた書物を出版した。

波多野太郎は『月琴音楽史略』に収めている『清楽歌譜』という楽譜の説明で、次のように述べている。

「『打蘆柴』、『水滸傳　林沖雪夜走梁山泊』『同　武太郎売焼餅』。その後に『林沖雪夜走梁山泊』と『武太郎売焼餅』の工尺譜が収められてある。詞句には都て発音が附けられてある。戯曲音楽といったところ」（波多野 1976：17）。

塚原康子は『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』（塚原 1993：312-313）において、清楽の衰退をめぐっては日清戦争の影響と、明清

楽には西洋音楽のような制度的な基盤がないため、などの原因に結び付けることができるのではないかと考察している。

さらに、清楽の内容に関しては、同書で次のように述べている。

「貿易のため、長崎に来航した人々の多くは中国南方の江南、福州、泉州、広州などの出身者であたったため、清楽として伝えられた音楽も当時それらの地方で行われていた雑曲や劇音楽の一節など含んでいることが曲名から窺えるが、清楽の出自についてははっきりしたことは未詳である」(塚原 1993：273)。

両者は以上のように戯曲音楽或いは劇音楽という清楽における戯劇性について言及しているが、何故清楽にこういった楽曲があるか、また当時誰が、何のため、どこでこういった戯曲を演じたかということについては説明が不足している。

従って、清楽の衰退ということについても、先の指摘以外の可能性もあるのではないかと考えられる。

三、江戸時代に長崎の唐人屋敷における祭祀と戯曲

従来の清楽に関する研究では、清楽を伝承する人物は金琴江と林徳建及び長崎明清音楽保存会の会員である小曾根キク子、中村キラなど、彼らの系譜に属する人を指している。

そのため、江戸時代に長崎の唐人屋敷に住んでいる唐人、即ち華僑については、清楽という音楽が彼らの生活にどのような役割を果したかということは見落されてしまっていた。

そうしたことを考察するに当たっては、その当時、唐人が滞在していた唐人屋敷の暮らしぶりの解明が手係りになるであろう。

長崎市立博物館館長原田博二によって書かれた「長崎県立美術博物館

蔵　石崎融思『唐館図』」という論文に次のことが述べられている。

「媽祖は菩薩とか天后と呼ばれ……長崎に来航する唐船には必ず媽祖が祀られていた。

そこで、長崎港に淀泊中は、その天后や唐三ヶ寺の媽祖堂に安置されたが、唐船から降ろして天后堂などに安置することを菩薩揚げ、唐船に乗せることを菩薩卸しと呼んだ。

その行列は「天后聖母」の額を先頭に、銅鑼などをにぎやかに打ち鳴らして進んだ……」（長崎国際文化協会 2000：33）。

また、林正康は『長崎華僑物語』という書物のなかの「唐人屋敷」という文章で、長崎市立博物館蔵 川原慶賀によって描かれた「唐館絵巻」における「観劇図」（写真一　長崎市立博物館蔵　川原慶賀作 1830）を取り上げ、どのような「劇」を「看る」のかについて次の説明を加えている。

「天后聖母の旗が立っている御堂は土神堂であり……、土地神の誕生日である二月二日の土神堂の祭に、土神堂の前広場に舞台が仮設され唐人踊りが開催されているところを描いている」（長崎中国交流史協会 2001：53）。

同じ文章の中で、林正康は唐人屋敷の暮らしと唐人踊りについて、次のように詳しく説明した。

「唐館に滞在中の唐人のなかで、腕の刺繍をまとって舞台で歌舞を演じる。その内容は水滸傳、三国志などの物語や郷土の昔話などを脚色して演じた。そのなかで、目連といって、仏弟子目連尊者が地獄の母を救う筋書きのものは、演技が難しいところがあって、やりこなせる者が少ないので、なかなか上演できなかったという」（長崎中国交流史協会 2001：58）。

川原と林の説明から、長崎唐人屋敷における祭祀と戯曲について、次の三点が明らかになる。

１．屋敷に暮らしていた華僑は、天后聖母と土神堂にを祭るときには、銅鑼を打ち鳴らすかあるいは唐人踊りという「劇」を開催した。

２．人踊りという「劇」は水滸傳、三国志などの物語や郷土の昔話などを脚色して演じた。

３．しかし、難しい演目もあって、なかなか上演できなかった。

この三点を総括すると、長崎の唐人屋敷に滞在していた唐人は確かに、「九連環」などといった曲をも楽しんでいたが、年中行事のなかでは「水滸傳」、「三国志」などという唐人踊りにあたる「劇」も演じたが、難しい演目は上演できなかったということがいえよう。

このことは、清楽の衰退が曲の難しさにあるということを示唆しているのではないかと考えられる。従って、清楽の衰退は必ずしも日本人の中国観に結びつけられないのではないかと指摘が出来よう。

四、清楽にある戯曲の曲目

前述の波多野太郎が取り上げた『清楽歌譜』という楽譜に収められている『打蘆柴』、『水滸傳　林沖雪夜走梁山泊』『同　武太郎売焼餅』はまさに唐人踊りという戯曲音楽と考えられる。

また、波多野太郎の『月琴音楽史略』(波多野 1976) と塚原広子の『月琴新譜』(塚原 1991) におさめられている 42 冊の楽譜集、241 首の曲を調べた結果、「水滸傳」、「三国志」或いは物語や郷土の昔話に関連する曲目については、すでに挙げた三曲のほかに少なくとも次の５首がある。それらの曲名は次の通りである。

１．翠賽英

２．三国志（曹操と関羽）

３．孟浩然踏雪尋梅

４．趙玄郎打雷神洞

５．劉智遠看瓜打瓜精

五、清楽における戯曲と台湾に現存する「北管戯」とのかかわり

以上に取り上げた全部で８首の戯曲の中で、「孟浩然踏雪尋梅」という戯曲は明の憲王によって作られ、今日は上演されることがないが、それ以外、「翠賽英」をはじめ、「趙玄郎打雷神洞」等の戯曲は台湾の「北管戯」に看られるのである。

その原因は、長崎に行った鄭成功に従って、清楽が福建から貿易商等の人によって、長崎に伝承されていたのと同じように、「北管戯」もその後、鄭成功に従って台湾に移民した人々が持っていた音楽ではないかと考えられる。

このことを立証するため、雷神洞を例として、清楽における戯曲と台湾に現存する「北管戯」とのかかわりを明らかにすることを今後の研究課題としたい。

引用・参考文献（出版年代順）

波多野太郎

1976　『月琴音楽史略』　横浜：横浜市立大学

平野健次

1983　「明清楽」下中邦彦(編)　『音楽大事典』５　東京：平凡社　2465-2467

塚原康子

1988　「明清楽―江戸の外来音楽」『季刊コンソート』　東京：草楽社

大貫紀子

1988　「明清楽と明治の洋楽」蒲生郷昭　他(編)　『岩波講座　日本の音楽　アジアの音楽』　東京：岩波書店　98-120

塚原広子

1991　『月琴新譜』　長崎：長崎文献社

塚原康子

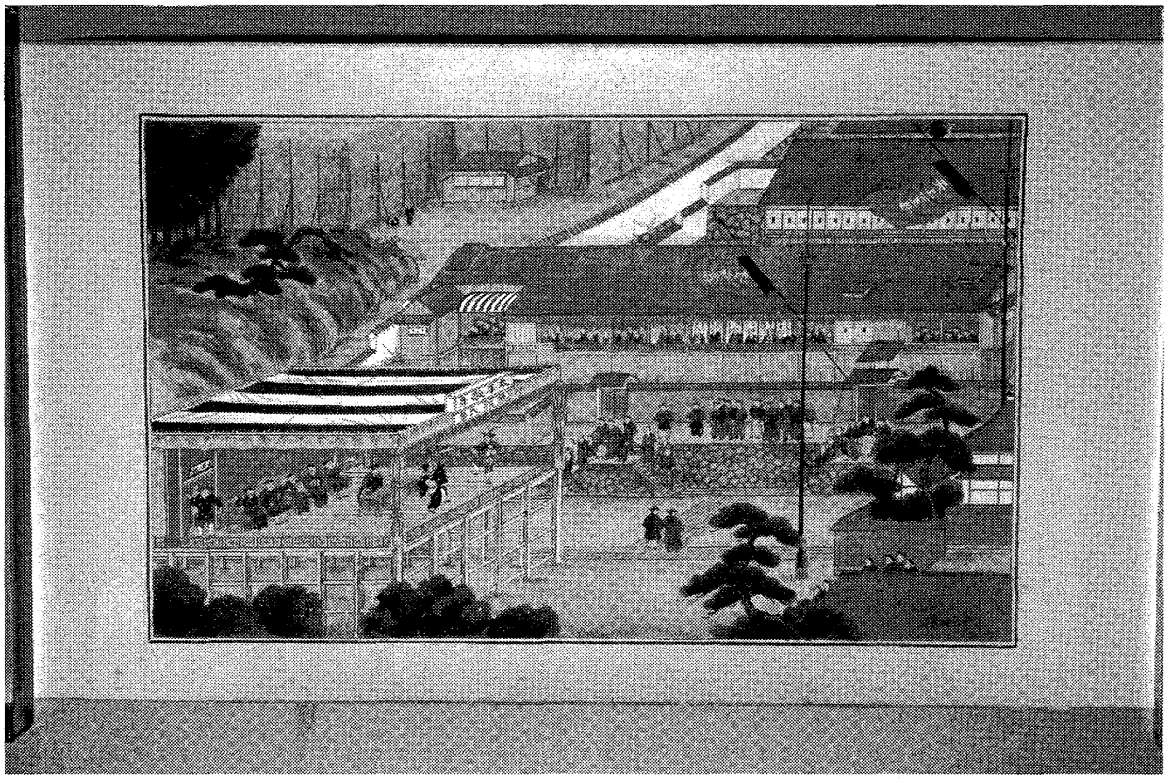
1993　『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』　東京：多賀出版

長崎国際文化協会(編)

2000　『長崎文化』　長崎：長崎市役所

長崎中国交流史協会(編)

2001　『長崎華僑物語』　長崎：長崎県労働金庫



写真一　「観劇図」長崎市立博物館蔵　川原慶賀作　1830

よう　けいこう

国立台湾大学中国文学学科卒業、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程単位取得。主要論文：「日本と中国の両国における九連環の広がりとその変化」（お茶の水女子大学『人間文化論叢』第5巻2003年）、「魏氏楽譜の解読について」（京都黄檗山万福寺　黄檗文化研究所『黄檗文集』第122号2001－2002年）、「魏氏楽譜の解読について－明楽における中国の宮廷音楽と仏教音楽」（京都黄檗山万福寺黄檗文化研究所『黄檗文集』第123号2002－2003年）。共訳書：徳丸吉彦『民族音楽学』（中国：福建教育出版社、2000年）著書：『台湾の南管』（日本：白帝社、2003年）。